

國民精神と佛教

古 田 紹 欽

最近は「國民精神」という言葉ははやらないようでありまして、試みに百科辭典などを引きましても「國民精神」という項目はありません。國民精神という言葉を目にしますと、國民精神總動員とか、國民精神作興の詔書というような、戦前にもつた言葉のイメージが蘇つてまいりまして、そうしたことからさらにこういう言葉を現代にあつては用語としては避けようとする傾向があるかと存じます。

しかし、わたくしは國民精神という言葉にこだわつて話を進めたくないのであります。何處の國にしてもその國の國民があり、またその國民のもつそれぞれの精神があるわけでありまして、われわれの國民のもつ精神とか、國民のもつ思想ということが考えられる筈であり、そうした意味合いにおいて、「國民精神と佛教」という問題を、わたくしなりに考えておりますことの一端をこれから述べてみたいと存じます。

先ほども末綱先生の示された統計のうちにあらわれておりましたように、日本人の信仰というものについては、統計的

にこれをあらわしますと一六〇パーセントというような信仰状況の妙な結果が出てまいるのであります。つまりこれは日本人の宗教的信仰というものが重複した複數的信仰であるということに起因して、このような統計の結果が出るのであります。

實は、わたくしもこういう問題についてかねてから關心をもつていまして、一昨年でしたか、ある英文の外國人向きの書物のなかの一部門で日本人の宗教信仰について述べなくてはならないことになり、どの宗教をどれだけの人々が信じているかの統計を調べましたところ、驚いたことには國民全體の數よりは信仰人數の方がうわ廻つていたのであります。外國人はきつと奇異なことに思うに違ひないのであります。御承知のようにこの點は日本人の宗教的信仰は一宗教に必ずしも限らない場合が多いのであります。日本の神道をただちに宗教と見ていかどうかについては論議もあろうかと思ひますが、とにかく佛教を信じていて神道を信じている例は少

くないのであります。佛教・神道のことに限らず同時に他の宗教を信じている例はあります。日本の佛教を考へる場合にこうした日本の宗教の特殊性にからまる問題を検討しなくてはならないと思ふのであります。

ただこれからわたたくしが申上げようとするのは現代の問題としてこれを検討しようといふのではないのであります。現代の日本の佛教と國民精神といふことになりますと問題は別の論點から申さなくてはならないことになりましよう。その點についてはひとまづ論外といたすことにしまして、佛教が日本に傳わり特殊な性格を形成して發展したその特殊性がどのように考へられるかについて主として古い時代のことを申上げることにはいたしたいと存じます。まづ私は佛教の日本へその傳わり方に大いに考へるべきことがあると思ふのであります。ヨーロッパ大陸の國々のように國境が接近しておりまして、文化の傳播が時間をおくことなく、一國から一國へと速かに波及し易い場合、一國の文化が特殊な性格をもつて土着化するということがなかなかむずかしいことで絶えず影響を受け合うことになるのではないかと思ふのであります。陸續きであれば交通が便利であり文化の面にあつても交流は易いものと考えざるを得ないのであります。それに對して島國というものは、海上交通が頻般とならない限り、海によつて隔てられ、文化の面にあつても交流とか、影響とかい

うことが困難であるわけであります。

鎖國などということも海に隔てられておればこそ出來たこととあります。日本は自然的狀況において四圍が海に包まれており、朝鮮半島とか、シナ大陸から文化が傳わつてくるには來ましても、せいぜい何百トンとかいうような船に舶載されて文物が日本に傳わつてきたわけであり、しかもその傳わり方がきわめて緩漫に年に幾回とか、何年に何回とかといふ具合の傳わり方であつたわけであります。佛教が公傳した時代の日本の文化的水準は半島や大陸の文化に比較すると低いものであつたに違ひないのであり、高度の文化が日本に齎され、その影響を受けたのであります。その影響のうけた方が緩漫であつたことから、その文化を攝取し吸収することに時間をかけることが出來たのであります。このことは強力な文化の影響を受けて、その文化の支配下に入つてしまふということが無くて濟んだのであり、自主的に文化を吸収することが出來たのであります。佛教が傳へられた當初は百濟の佛教であつたわけであります。百濟佛教が日本の佛教に性格を變えて行つたのであります。

日本佛教の歴史を見ますと、奈良・平安・鎌倉のいづれの時代——一時は遣唐使がとだえたり大陸文化との交渉を斷つたということもありますけれど——にあつてもシナ大陸と交渉をもち、大陸の佛教を傳へたのであります。それぞれの

時代に於て、その時代の特色をもつ日本の佛教を形成したのであり、大陸の佛教が洪水のように日本に押し寄せ、無茶苦茶に佛教が流れ込んで来て、日本に佛教が土着化する餘祐を與えることがなかつたというようなことはなかつたのであります。つまり飛び石のように飛び飛びと外國の文化が日本に傳つたということであり、佛教が急速に傳つて消化不良にならなかつたということであり、佛教の傳わり方に重大な意味があつたと思つてあります。朝鮮半島の佛教などは何んといつてもシナ大陸と陸続きであり、思想的に消化するだけの時間的餘祐がなく、大陸の佛教が急速に絶えず傳つたところに、獨自の佛教を形成する暇が無かつたのではないかと推量するのであります。

この飛び石式に佛教が傳つたことに併せて、もう一つ注意すべきことは、佛教が初めは宗教として傳つた以上に佛教の背景にあつた文物が傳つたということであり、宗教として傳わるということになりますと、傳つた國に存する固有信仰との間に抵抗が生ずるということ、その固有な信仰が原始な信仰であろうともとにかく異質的な信仰が入つてくるのでありますから、對立・抵抗が必らず生ずるものであります。佛教公傳の際に見られた奉佛可否の論争はこのことを物語つております。しかしその當時の日本人にある特定の佛教信仰がいだかれていたとは思えないのであり、いわば傳つてき

たものを行き當りばつたりに受け入れたというのが實情でありましょう。釋迦信仰とか、彌陀信仰とか、觀音信仰とかいふ具體的な信仰をはつきりともつ信仰にまで佛教が深められて信ぜられたとは思えないのであります。段々と具體的な信仰をもつようになつて行くのであります。段々となつて佛教が土着化として行く過程にはやや時間がかかつております。行き當たりばつたりに佛教を受け容れた際、佛教が奉ずる立場を取つた人達が佛教に魅力を感じたのは佛教の背後にあつたところの大陸文化であつたらうと思つてあります。この文化への魅力が佛教を受け容れる一つの要因となつたであらうことは疑えないのであります。明治に於けるキリスト教の受容の歴史を考えますと、このことは充分に思い當ることでありましょう。佛教の背景にある文化を受容することによつて佛教を含めて受容したのであります。

わたくしは日本へ佛教の傳つた傳り方が考慮しながら日本佛教として生長した佛教に三つの性格を分類するのであります。佛教公傳以來、奈良佛教に至る佛教は概して云えば文化としての佛教、學問としての佛教という傾向が強かつたものと見るのであります。このことは平安佛教でも同じであります。平安佛教はこの學問佛教を體系化することが出来た點が、奈良佛教と大いに違つていふと思つてあります。平安時代になると佛教の學問が自分のものになつていたのであ

り、それに併せて日本人としての自覺が出来、そのことに伴つて信仰が確立されようとしてくるのであります。奈良・平安の佛教に學問上の論争は別として、宗教信仰からする排他性が見られないことは見逃してはならない性格であろうと存するのであります。宗教信仰からする排他性が顯著に出てくるのは鎌倉佛教であり、鎌倉時代になりますと、多くの人々が指摘しておりますように、日本人の宗教意識が目覺めて参りまして、鎌倉新佛教の興起を見、宗派的な對立というようなものを感じてくるのであります。わたくしは平安佛教を學問的な「複合佛教」と呼び、鎌倉佛教を「擇一佛教」と呼んでおりますが、この二つの性格に併せて奈良の「學問佛教」を一つの性格と見るのであります。

それはともかくといたしまして、日本人が佛教を取り容れ、消化して行つた過程が多分に文化、學問としての佛教であり、それが日本佛教の根底をなしたことは極めて注意すべきことであろうと考えるのであります。學問、文化を取り容れることによつて佛教が自然と入つてしまつたのであります。わたくしは佛教が學問として最初に入つたことに重要な意味があることを認めるのであります。この點については別に既に論じたことがありますので、これ以上觸れないことにいたします。しかし何んと云つても外國から別な宗教が入つてきたのでありますから、その異質性についての問題はどうしても

残る筈であります。佛教が半島や大陸の文化を傳へ、その文化が吸収されるに伴つて佛教も吸収されて行つたといつたしましても、宗教の問題は文化の問題程簡單には行かないのであり、殊に日本人が宗教的なものに目覺めて参りますにつれて、どうしても佛教を異宗教とする見方が起らざるを得ないのであります。この點をどのように日本人が解決してまたかということ、そこに佛教が外國の佛教とし信ぜられるにとどまつたか、日本の佛教として發展を遂げるに至つたかの別れ目があつたのであります。このことについても既に述べたことがありますが、佛教が初めて傳つた際、日本人が佛教の佛をどのようなものとして理解したかということ、このことが先づ考えられねばならないのであります。日本書記や元興寺伽藍縁起に出ておりますように佛は佛神とか、他神とか他國神とか、外國神、蠻神とかと呼ばれていて、佛を神としてるのであります。國神に對して外國神という區別はありませんが、とにかく神という共通の觀念のもとに佛を見ているのであります。古代日本人の考えた神とは一體、何かということを論じなくては、神の概念は明確にならないことは勿論であります。神が人間の畏敬する對象であつたことは疑えないのであり、佛を神として崇めるものとしたことは間違ないものであります。

神という見方で佛を見たということ、そこに神佛一體思想

の萌芽があるのであります。奈良時代になると神佛習合の事實がはつきり出て參つてゐることは、學者がこれまでに指摘してゐる通りであります。神佛の關係は異質的なものでありながら一體觀を成立せしめて行くのであります。そうして神佛は同じような性格を帯びて行くのであります。例へば氏神信仰が氏族の間に起り、氏族が崩壞して氏神的なものが産土神的なものに變つて行つたとされますが、氏神的なものとして佛教には氏寺が出来、その氏寺的なものは云はば國土の寺のようなものに變つて參るのであります。歴史的に詳しくこうしたことを研究してゐるわけではありませんが、大體こうしたことが云えると考えております。奈良佛教になりますと寺は氏寺的な性格を段々持たなくなつてゐるのであり、國分寺などは明瞭に、國土の寺であります。國分寺は御承知のように國家佛教の特質を持つのであります。奈良佛教から國家佛教の特質を著しく持つようになつて來ましたのは、全く佛教の佛が日本の神と同じもの、と目され、日本の佛として考へられたことから出てゐるのであります。

日本佛教が國家佛教であることに對しては今次の大戦中にあまりにもその點を強調したことから、戦後、日本佛教のもつ國家佛教的色彩をことさらに否定しようという動きがあるように思いますが、戦時中に於ける佛教界の動きについては批判があるにしても、日本佛教が國家佛教の特質を持つたこ

とは佛教が日本に土着化した重要な點であり、これを否定することは出来ないであります。日本の佛教は日本という國土のなかに生長した佛教であるのであります。

國家佛教の思想は中國にも起つておりますが、佛教を護國思想として考えたことは日本の場合でも、中國の場合でも同じであつたかも知れませんが、佛教を自國の宗教とし、佛をも神とみなすような佛教とした點は日本佛教の中國佛教と異なるものが根本的にあると考へるのであります。

もつとも鎌倉佛教のうちには國家佛教の色彩をそれ程表面に現わさず、出世間的な傾向を示したものもあつたわけでありますが、その場合でも私はやはり國家佛教の別の面の現れと見るのであります。外國佛教でないところの日本佛教の現れに外ならないのであります。

結論を申し上げますと、要するに佛教は日本に傳つて日本佛教に性格を換えたのであります。日本という國の佛教になつたのであります。佛教はもとより普遍的な教えであり、國土によつて制限されるものではありませんが、その普遍性の教えが日本人の自身のもつ教えとして受け取られたのであります。インドとか、中國に佛教の本山があつてその支部のようになかたちに於て日本の佛教は成長したのではないのであります。「國民精神と佛教」という題について正面切つて申上げることになりませんでした時間が無いのでこれで。（拍手）